

釧路湿原の復元を求めて活躍する

NPO法人トラストサルン釧路（釧路市）

地平線のかなたまで無限ともいえる広がりを見せる釧路湿原。その中央東端の釧路町達古武^{たっこぶ}の丘陵地で、2010年5月から7月にかけて釧路市民を中心とした数十人による息の長い植樹が行われた。周辺山林の伐採や農業開発で保水力が落ち、土砂が流入して乾燥の危機にひんする湿原を、市民の手で何とか食い止めようと20年以上も前から続けられている植林運動だ。大役を担っているのはNPO法人「ナショナルトラストサルン釧路」の面々。一面笹原の傾斜原野で黙々と鍬を振るい、スコップで穴を掘り、自分たちで育てた幼木を一本一本植えてゆく。

19,000haにも及ぶ湿原からみると、小さな一石だが、そこにはかけがえのない自然の宝庫、釧路湿原を「元の姿で子孫に残すぞ」という会員有志たちの大きな夢が託されている。



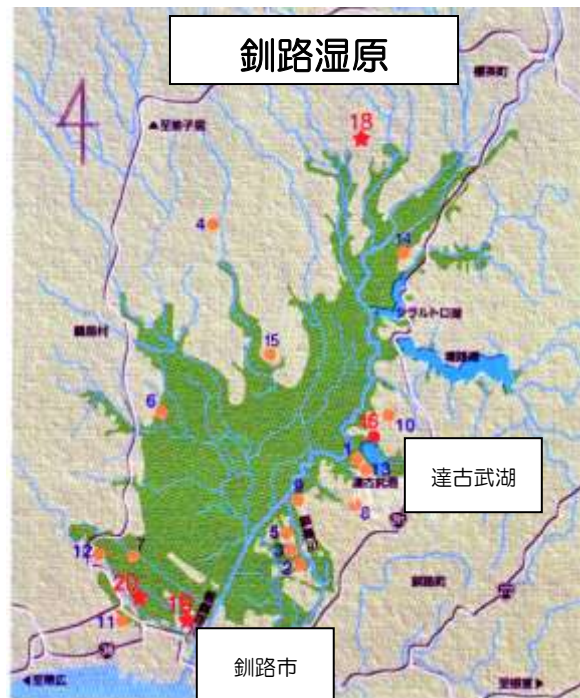
植樹に先立ちトラストサルン管理の苗畑から幼木を掘り起こす作業が続く

■ 開発行為で悲鳴を上げる湿原

釧路湿原は南北 36km、東西に 25km、面積ざっと 19,000ha に及び、ちょうど左手の手の平を広げたように扇状に広がる大湿原。全国に 230 カ所ほどある湿原の総面積の約6割を占める我が国最大の湿地帯だ。とくに国内には高山地帯にわずかしが残されていない低位泥炭層（植物遺体の堆積層）がほぼ完全な形で、平地に、しかも広大に残存している点で他に類がない。国の天然記念物・タンチョウの繁殖、生息地であるのをはじめ、ここにしかない動植物も数多い貴重な存在。だがこの湿原、かけがえのない貴重な自然と認識されるようになったのはほんのここ数十年の

こと。それまでは何の役にも立たない“無用の長物”として「ゴミ捨て場にしろ」、「埋め立てて放牧場にしたら」、などの思いが大方だった。水源となる釧路川が上流部で直線化されたり、ど真ん中に道路が造られたりしているのが何よりの証拠。それが近年、市街地の拡大や農耕地の造成といった開発行為で次第にむしばまれ始めた。湿原の命は“水”。その水の供給が、周辺の山林の伐採や水脈の分断で乏しくなり、たちまち周辺部から土砂が流入して乾燥化が進み、そのバロメーターであるハンの木が湿原内にはびこり出した。湿原は満身創痍で絶滅の危機にひんし、悲鳴を上げた。

左手小指の付け根あたりに位置する釧路町達古武地域も同じ運命をたどっていた。達古武湖やその北側の塘路湖、シラルト口湖とその周辺山林丘陵地は、湿原に注ぐ“水”の重要な供給地。かつてそこは保水力の高い広葉樹林で覆われていたが、有効利用の名のもとに皆伐され、原野商法の対象になって切り売りされていた。



左手の手の平を広げたような釧路湿原。赤●印は湿原全域に広がるサルン管理保護区

この地で生まれ育ち、本州での勤務を途中でやめUターンした杉沢拓男さん（64）は、数十年ぶりに帰郷してがく然とした。

子どもの頃、泥んこになって遊んでいた湖沼、山林、それに連なる湿原が見るかげもなく荒れ果てていた。水深3m はあった達古武湖は、周辺部で木を伐られ、土砂が流入した結果、国土地理院の調査で1.6mまでに浅くなり、そこから水を受ける湿原も当然、乾燥化が進んでいた。調べたところ、こうした自然破壊と乾燥化は湿原周辺全域で起きており、かつて28,000ha はあった湿原エリアは19,000ha に減少していた。

■ 植樹活動に立ち上がる

「このままでは釧路湿原はダメになる。古里・達古武だけでも昔の自然を取り戻し、水源を確保し、子どもの頃の姿を次の子どもたちに残さなくては……」こう決意した杉沢さんは、幼なじみの何人かにこの危機を語り、昔の復元に賛同した数人と共に丘陵地に木を植える活動を始めた。「トラストサルン釧路」の元となる植林活動のささやかなスタートだった。今から 30 数年前、1970 年代のこと。

最初は知人から提供を受けた荒地に、地元で山林で芽出したミズナラ、ヤマモミジ、ヤチダモなどの幼木を移植するという方法や、苗木を購入して植林していたが、資金面や人不足、土地不足で何度も存続の窮地に立たされた。各自の持ち出しで何とか持ちこたえているうち思わぬ追い風が吹いた。1980 年、釧路湿原がラムサール条約（水鳥の生息地として重要な湿地に関する国際条約）の、我が国第一号として加盟、登録されたのだ。

その国際会議が釧路市で開かれたのを契機に「湿原を守れ」の世論がぐんと高まり、細々と植樹を続けてきた杉沢さんたちの活動に光が当たった。植樹の労力や資金提供を申し出る協力者が続々と参集。そこで活動がより活発に行われるよう、広く国民から寄付金を募り、土地などを借地、購入し、保護、保全をしていくナショナルトラスト方式に切り換えることとし、その名もアイ

又語で「湿原」を意味する「サルルン」を縮めて「サルン」を冠して新スタート。

釧路湿原が国内第 28 番目、最後の国立公園に指定された 1987 年の一年後のこと。さらに 2001 年には NPO 法人となった。「トラスト方式になってほっとしました。経営的には今でも楽ではありませんが、これで何とか土地の確保や植林が思うように出来ると思ったからです」と、創設者の杉沢さんは語る。

■ 活発な活動、他の団体の誕生・参加を促す

その熱い思いは、現理事長の獣医師・黒沢信道さん（54）にそっくり引き継がれ、トラストサルンの活動はここ数年、極めて活発。

毎年 5 月下旬に行われる「湿原再生の森づくり」と名付けた一斉植樹の日や、秋、ドングリを拾って播いたり、植樹する「どんぐり記念日」には、会員はもとより、市民ボランティア、地元の小中学生らが数十人単位で集まり、木を植え、タネを拾い自前で苗畑に播く。

平行して 5 月から 7 月までの植樹期には毎週末に会員らが木を植え、下草を刈り、鹿の食害から幼木を守るための柵張り作業などに汗を流す。これまでに植えた木は延べ 10 万本以上。初期に植えた幼木は高さ 10m 近くにも成長し、その群生は林となって保水力を持った水源林になるのももう間近か。

トラストに対する道民、国民の寄附で土地の寄贈も順調で、現在の保護保有地は200ha以上、管理、信託植林する場所は周辺地域で21カ所にのぼり、復元、保全の大きな役割を果たしている。栗田加代子理事・事務局長の話では現在会員は法人を含めて280人、募金や植樹の協力者は550人。ほかに植樹、育苗、防鹿、土砂流入防止試験、湧水地保全調査など色々な事業に手を貸してくれる市民や住民は数多い。また、経費はすべて会員の会費と寄附でまかなわれ、楽ではないが、人々の善意がそれを支えている。



湿原の再生に夢をかけ、荒地で植林に汗を流すトラストサルンのメンバーたち

それにも増してこのトラストの果たした役割は大きい。「湿原を守れ」の行動は多くの住民、道民の心を揺り動かし、動植物を調査、研究、保護するグループ、周遊木道や湖面、河川を清掃、浄化する団体、歴史や効用、有効活用を研究、提案する組織など、100近くもの湿原保護団体の誕生、活動を促したのだ。さらにこうした各種の活動は、その後次々とラムサール条約に登録

された霧多布湿原、サロベツ原野、雨竜沼湿原、風蓮湖・春国岱など道内外の多くの湿原、湿地帯の保全や利用のあり方にも範を示す広がりを見せている。

国内の湿原研究第一人者で、環境省条約湿地検討会座長の元北大教授、辻井達一さんも「地域の人々に、自然と共生する新たな生き方が見てとれるすばらしい活動」と高く評価している。

多くの人々の善意と夢を乗せてこの日湿原の水は、心なしいつもより軽やかに流れ、ヨシで覆われた緑のじゅうたんは涼やかな風に揺れていた。

■ 連絡先

〒085-0816 釧路市貝塚2-6-3 福島ハイツD号室

NPO 法人トラストサルン釧路 栗田 加代子

TEL：0154-44-5022／FAX：0154-44-5023

Email：trustsarn@nifty.com

URL：http://homepage3.nifty.com/trustsarun/index.html